

乃木悠城は破壊者である

たうこさひつま

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつてバーテックスの侵攻から世界を守りきった初代勇者・乃木若葉には弟がいた。

これは本来の歴史と違う。乃木悠城。彼一人の存在で世界はどう変わるのか。そんな未来を描いたif戦記。

少女たちにもたらされるのは、栄光か、さらなる絶望か。

# 目次

繋がらないはずの未来	1
居るはずのない人間	6
あるはずのない力	13
守るべきもの	20
友情の境界線	26
精霊の底力	31
最後の一本	37
ヒーロー、現る。	43
守るための身体	50



# 繋がらないはずの未来

——全て、間違っていたのか、私のやってきたことは。

世界で人類に残された数少ない土地、四国、香川県。

その中でもかつて観光名所として栄えた丸亀城は今、火の海に包まれていた。

その煌々と燃え盛る炎と煙で視界が揺らぐなか、二人の少年少女が向かい合っていた。少年は立っているが、少女は膝を突き、目の前の少年を見上げている。

「ぐ……。はあつ、はあつ、はあつ……。」

精霊・源義経を身に宿す少女、乃木若葉は身体にムチを打ち、立ち上がろうとする。

しかし身体中に受けた傷の痛みがそれを許さない。気を抜けば今にも精霊の力まで手放してしまいそうだ。

「もう諦めなよ、牛つころ。もうお前が出しやばったところで何もかも手遅れなんだって。」

若葉はもう一度身体に力を入れて、立ち上がろうとする。不屈の覚悟が彼女を中腰程度まで立たせた。

しかしまた倒れる。無理をして傷が開いたから、倒れた衝撃で血が周囲に飛び散っ

た。

「だから言ったじゃん。もうお前には以前ほどの力はない。お前にあるのは今までの力の残りカス。だから大天狗も宿せない。何も……守れない。」

「うる……さい……。」

若葉は床に這いつくばりながら、少年に言い返した。こんな状態でも、その目だけは強い意志が宿っている。

「私は……、勇者だ。みんなを導き……奮い立たせ、どんな絶望にも抗うそんな……勇者……」

「だった。だな。」

少年が若葉の言葉を遮って口を開く。

「かつてのお前ならそうだったね。でも、今は違う。」

「な、そんなことは……」

「違うだろ。力を取り上げられて見栄を張り、怖がり、自分の運命から目を背けてひなたさんに泣きついた。あんたはそんな牛なんだよ。」

「違う!」

「違うない。力を持つ前のお前は、そうじゃなかった。」

少年は、冷静な口調を保ちながら、身体の内から熱いものがこみ上げてくるのを感じ

た。怒りだ。

憎い。この女が憎い。自分から全てを取り上げておいて、人の羨むものをすべて持っているながら、自分では何も出来なかったこの女が憎い。

「小学校の5年生だったっけ。お前が力を持つ前は強くて、意志がはっきりして、みんなを引っ張っていきける。強いやつだった。」

「私は勇者になってからも、そんなふうには……」

「やってない。力に溺れて、自分なら何でもできると思い込んだ。できなかった時、お前は仲間を見殺しにした。だから4人は死んだんだ！」

少年はついに我慢できなくなって、強い口調になった。泣きながら聞いていた若葉はうつむいて、目が隠れてしまった。

「なんか言いたいこと無いのかよ。」

少年が聞くと、若葉はしぼんだ震え声で応えた。

「4人じゃない……。」

「は？。」

「死んだのは4人じゃない！2人だ！そっちこそ、私を貶めたいからつて数をチョロまかすな！」

「……ああ、そういう事か。なら何も言えないわな。」

「何を勝手に納得している……!」

「お前、無意識に未来見てるだろ。」

少年の言ったことの意味が、若葉には分からなかった。

未来を見る？ 普通ではありえないはずのことを唐突に言われ、今の悲しみと周囲の暑さでどうにかなってしまいそうだ。

少年は倒れている若葉に近づくと、ズムつと髪を掴んで無理やり身体を持ち上げた。

若葉の頭に、鋭い痛みが走る。

「な、何を……。」

「だったら戻れ。現実に戻って、時間に追いついて。未来を見たんだから過去ぐらい変えてこいよ。お前は俺に無いものを持ってんだから。」

若葉は訳も分からず、何のことか聞こうとするが、口が動かなかった。

煙や炎の陽炎かげろうで不自然なほど視界がゆらぎ、聞こえるはずのない声が聞こえてきた。

「……ばちゃん、わかばちゃん。朝ですよ……」

その声はどこか暗く、切なかつた。

「若葉ちゃん！大丈夫ですか!? すごく魔まされていましたが……。」「  
気がつくとベッドの上において、その脇には巫女服を着たひなたが立っていた。いつも  
の制服姿ではない。」

「……ああ、すまない。少し変な夢を見ていたんだ……。悠城ゆうぎの……。」

「悠城さん、ですか。そうですね。もう若葉ちゃんの弟さんが亡くなってから、3年も  
経ちますから……。」

「そうだな。そしてまた、私は大切な人を失ってしまったんだ……。」

「……四国は諏訪よりも勇者の人数が多いせいで、大社でも安心されていたのにな。」

その日は、新型のバーテックスの襲来によって命を散らした、二人の勇者の葬儀の日  
だった。

## 居るはずのない人間

土居球子と伊予島杏。

2人は蠍さそりの名と姿を冠した新型、スコーピオン・バーテックスに身体を穿たれ、その命を散らした。

今までの個体を遥かに超える頑丈さと強さ。並の精霊では全く歯が立たず、友奈の精霊・酒吞童子をもってようやく撃破した。

大社は二人の勇者の死を、すぐに発表することはできなかった。

そんなことが広まれば、四国中が大混乱に陥る。

よって、二人の葬儀は、大社の関係者と巫女のみでひっそりと行われた。

暗い空気と悲しみの声で葬儀の場が包まれる中、若葉は用意された椅子に座って頭を抱えていた。

私にあの力が宿せるのだろうか……いや、それ以前に……

「若葉ちゃん、二元気を出してください。」

葬儀の場で、隣に座っていたひなたが若葉をそつと励ます。

「若葉ちゃんたち勇者は四国の希望です。もしそんな落ち込んだ姿を見られたら、四

国の人たちはどれだけ不安になるでしょう。」

「……そうだな。やはり私達が——」

「うああアア!!」

突然悲鳴にも似た泣き声が聞こえ、若葉は思わずその方向を向いた。

その声は亜麻色の髪をみつ編みに結った少女で、勇者の力に目覚めたばかりの球子と杏の手助けをした巫女、安芸真鈴のものであった。

「なんで……なんで死んじゃったのよ、2人共!」

「安芸さん……。」

悲痛な叫びを聞いたひなたが心配そうな目で彼女を見てみると、彼女の後ろで今度は覇気のない声が聞こえた。

「寂しいものね。命を懸けて戦ったのに、悼む人がこれだけだなんて……。」

「千景……。」

彼女の言葉に若葉が苦い顔をする。確かにこの葬儀はまだ世間に発表されていないため、人は少ない。

彼女らの両親ですら、まだ娘の死を知らずにいるだろう。

「……千景、勇者は四国の人々の希望なんだ。わかっているとかが——」

「それ上里さんに言われたのね。ありきたり過ぎるわ……。」

若葉は凶星なことを言われ、何も言えることがなくなる。

「前から思っていたのよ……。あなたは人を鼓舞するのは得意でも、励ましたり、喧嘩を仲裁することに向いてない。」

「そ、それは……。」

「それはあなたが理想論しか喋らないからよ。弱い人間の気持ちなんて、考えたこともないんでしょ？」

正直、若葉は苛立った。みんなが不安がついているときに自分だけがこんなに言われる道理はない。

若葉自身、これからのことは不安だ。

「ソーレーわっ！この人が口下手なんだからしょうがないことでしょ？お姉ちゃん！」

千景の後ろから千景の背中にムギュつと抱きついた人影がいた。この状況で、驚くほど陽気な声だ。

若葉はその人を見て違和感を感じた。

自分と同じ金髪の子だった。白のパーカーとジーンズに黒のジャケットを着た中性的な少年。

「なんだ、この子。千景、知り合いか？」

しかし千景は、驚いたように目を見開いて少年を見ている。

脳天気な少年は2人のことなどお構いなしだ。

「えーつと、土居さんと伊予島さんのお葬式つてここだよね？正装がないから、ちよつとやることやつてさつさと帰ろうと思うんだけど……。」

「ああ。お2人の友人の方ですね。前の方に棺がありますから、あちらに……。」

「はいはい。さつさと終わらせて帰ろーつと。」

少年は若葉や千景の横を通り越して棺の方へ歩いていった。

「……びつくりしたぞ、千景。お前に弟なんていたんだな。聞いてなかったぞ。」

「え？あれはあなたの弟じゃないの？てつきり髪の色とか名字が同じだからそうだと  
思った。」

「？…？ どういうことだ？」

これ以上会話をする気力もないかのように、千景は席に座ると俯いてしまった。この  
態度の相手に声をかけるべきか、若葉が悩んでいると、

「若葉ちゃん……、あれ……。」

ひなたが怯えたように少年の背中を指差した。

その先をみると、少年の背中がびっしりと血で濡れていた。

—————

「ひつく、ひつく……っ誰……。」

「ごめんなさい。大切な葬儀のときにあんなに騒がしくしちやつて。棺の縁で泣いてるってことは、2人とは親しかったですよね……。」

少年が安芸に申し訳なさそうな顔を見ると、彼女は静かに首を横に振った。

「ううん、いいの。少しぐらい騒がしいほうが、二人も喜ぶと思うし……。」

「杏さんは静かな方がいいでしょう。あの人本が好きなでしょ？新聞に書いてありました。」

「ふふっ、そうね。」

安芸は涙を拭い、少年に笑顔で2つ横並びになつた棺を手で示す。

「君も二人の顔を見てあげて？明るい人に見てもらったら2人も喜ぶから。」

この人、良い人なんだ。良かったね、こんな人が最後の別れに来てくれて。

「それあなたの願望ですよね？」

「……へ？」

少年のさつきまでと全く変わらない表情から出た言葉の意味が、安芸にはさっぱり分からなかった。

少年は2つの棺の周りを半周回って、安芸や若葉たちの席と向かい合うように立った。

「知らないんですか？死んだ人は目は見えないんですよ？そもそも、何の役にも立たないあなた達巫女が、どうしてこんな重要な部屋に入れるのか疑問ですけどね。」

「……そ、そんなこと……あなただつて一緒じゃない！大体、勇者でも巫女にもなれない男の君が、どうしてここに入れたのよ！」

「止めるやつ全員殺したから。」

「……へ？」

「わかりませんか？ここに来てる人間は、何かしら大社と関わりがあります。男で、なおかつ子供の僕はどうやったところで大社から情報を受け取れない。なら……」

その時、葬儀場の扉が開け放たれ、神官と思しき人物が叫んだ。

「誰か来てくれ！外で待機してた人間が全員血を流して倒れてる！すごい数だ！誰か！」

その叫び声を聞いた神官や巫女の多くが葬儀場から出て、外にいる人たちの手当てを始める。

「あなた……。一体何を……」

「そこのお前。」

少年が振り向くと、抜刀した若葉が刀の切っ先をこちらに向けている。

「外にいる人たちはお前の仕業だな！勇者が死んで一大事のときに、どうしてこんなことができるんだ！」

その慄然とした言葉に、少年はニヤリと笑った。ネチャツと音が聞こえてきそうな、粘着質な笑み。

「そんなの決まってるじゃん。だってー」

少年はそう答えながら、後ろに右足を大きく振り上げた。

まるで子供が、サッカーでカッコつけて派手なシュートを決めるかのようだ。

「俺、バーテックス側の人間だもん」

その足を大きく振り下ろし、棺のぶつけた。

瞬間、棺は宙を舞った。

## あるはずのない力

許せなかった。身体が芯がカツと熱くなった。

それで、それだけで、殺したいと思ってしまった。

突然現れた少年に蹴り飛ばされ、転がった棺。その中に安置されていた少女も、棺の外に飛び出してしまっている。

若葉は壁に少年を追い込み、彼が逃げられないように顔のほんの数センチ横に刀を突き刺していた。

バーテックスと戦うための武器を、勇者服まで纏って。

「……どういふつもりなのかな。こんなことして。一応外見は人間のつもりだったんだけど。」

少年は自分に少なからず殺意を持った少女と肉薄し、追い込まれた状態で呑気な声を出した。

その発言が、より若葉の怒りを増幅する。

「……どういふつもりもないだろう。私の仲間や大社の人たちにこんなことをして、身の安全は保証できないぞ。」

その怒りを抑え込むように、若葉は刀の柄を強く握る。

しかし若葉はそこまで耐えた。これ以上進んでしまえば、彼を殺すことになってしまいかもしれない。

口ではおかしなことを言っている、一般市民であるかもしれない少年にそんなことはできない。

あくまで言葉で改心させようとする若葉に、少年が口を開いた。

「さっきの巫女と同じで、おかしなことを言うんだね。あそこに転がってるのは仲間、じゃなくて肉塊、だよ？あの二人はもういなくなつたの。それがどうしてわから——」

「黙れ！あの2人は四国を守るために全力で戦つた！それを知らないお前に、2人をバカにする権利はない！」

「……。」

少年は首を少し横に傾けた。

若葉が、少年を逃げないようにするために壁に刺していた刀に当たり、少年の耳に切り込みが入る。

「悲しい」と言うなあ。黙れ、だなんて。」

少年はわかばの目をしっかりと見据えながら身体を若葉の方へゆっくり動かす。

「お、おい……。」

刀に切り込まれた耳は、血を滴らせながら刀を伝い、ついに2人はキスしそうなくらいまで近寄った。

少年は若葉になにか囁いた。当然、わかば以外には何も聞こえていない。

しかし若葉は、その言葉に過敏に反応し、後ろに飛び去った。

「ふざけるな！ 私は誰の手にも落ちない！ 誰にも媚びず、誰にも干渉されない！ それが勇者、乃木若葉だ！」

「あれあれ？ いきなりどうしちゃったの？ 落ちるとか媚びるとか。まさか意中の相手でも見つかったのかなあ。受け入れてもらえるといいね。その身体で。」

「うるさい！ 黙れ黙れ……！ 黙れ！ お前に私の何がわかる！ 私は……！」

ついに怒りの限界を越えようとしていた若葉の背中に、そつと手が当たった。暖かくて柔らかい。優しい手。

「落ち着いてください、若葉ちゃん。いつもの冷静さを見失っては、亡くなった2人も示しが付きませんよ。」

「ひなた……。」

ひなたは若葉をいつもの笑顔で励ますと、若葉の前に立ち、少年と向かい合った。

「勇者のお付きの巫女、上里ひなたと申します。まず最初に確認したいのですが、外に

いる人たちはあなたの仕業ですか。」

「うん、そうだよ。葬儀場に入ろうとしたのに入れてくれなかったから、ザクザクつとね。」

「……！」

ヘラヘラして答える少年に腹を立て、若葉がまた歩み出ようとするが、それをひなたが静止する。

彼女はまるで、犯人から情報を聞き出す、尋問官のようだ。

「次の質問です。あなたは先程、自分がバーテックス側の人間だと仰っていましたが、それはどういう意味ですか。」

「……。」

少年は黙ってしまった。彼はリズムカルに歩き始め、床に転がってしまった伊予島杏のところに行く。

「おい答えろ！ でないと、お前は私が——」

「殺すって言いたいんだろ？ 分かるよ、そのくらい。」

若葉は自分が無意識に抑え、そしてついに言おうとしていた禁句を的確に言い当てられ、戸惑った。

「この3年間で、随分と口が悪くなっちゃったよな。昔は俺をいじめから助けたりとか

してくれたのに。」

「なんの事だ……。」

若葉は怪しんで少年を見る。さつきまでの彼が仮面をつけた道化師だとすれば、今はその仮面を外して般若の顔でもさらけ出したような、そんな雰囲気だ。

「そういえば自己紹介はしてなかったっけ。僕は君の弟の乃木悠城だよ。よろしくね。」

「そんな……。」

「悠城が……、生きていたなんて……。」

少年の発言で、ひなたと若葉は言葉を失ってしまった。

「騙され……ないぞ……。悠城はバーテックスが現れたとき、長崎にいたんだ。あいつが生きているはずが……ないだろう……。」

「そっか。なら見せてやろうかな。俺が生きてたつていう証明。」

悠城は、戸惑いを隠せない若葉に見せつけるように杏の顔の上に足を置いた。

「……！」

ひなたは友人の顔が男に踏んづけられ、口元を手で覆った。

ガキいいイン!!

その金属質な音は、若葉の刀と、悠城の腕がぶつかることで起こった。

「ぐう……！」

若葉は予想外の手の痺れに顔をしかめる。

しかし、本当に予想外のことが起こったのは、その次のことだった。

「ぐわアアああ!!」

悠城がもう一方の腕を振るい、若葉を殴り飛ばした。

そのまま後ろにふっとばされ、並べられた参列者用の椅子にぶつかる。

床に転がる自分の姉と、その衝撃で飛び回る椅子を見て、悠城は満足そうな笑みを浮かべた。

「……元々、勇者っていうのは地の神、基い神樹に見いだされた女の子たちのことを言うんだろ。だったら……」

悠城は肩をすくめて両腕を左右に大きく伸ばし、大きな白い翼を発生させた。

「天の神に見いだされた俺は、なんて呼ばれるべきだろうね。」

「……天使……。」

ひなたが驚きと恐怖をにじませながら答えた。

人の肩甲骨の辺りから白鳥のような翼を広げる様は、まさにそう形容するしかない。

「お、ひなたさん、それいいね。うん、僕は天使の乃木悠城。君たち勇者を上回り、淘汰する者だ。」

悠城はさつきと同じ笑顔でそう言った。

ただ一つ違うといえば、その微笑みに、勝利への確信が含まれていたことくらいか。

## 守るべきもの

「天使……だと……!?」

若葉は翼の生えた自分の弟を名乗る少年を見据え、驚きの言葉を漏らした。

「ありえない……！ 私達の敵はバーテックスだったはずだ！ その力を、人間が持つなんて……！」

「ご明察だね。でも間違っていることが1つあるよそれはね……」

悠城は一旦言葉を切つて手のひらを若葉に向けた。

瞬間、黒い光を放つエネルギーの塊が現れ、若葉に向かって飛び出した。

「俺はバーテックスよりもさらに上位の存在つてことだ！ 完成体より強いことを保証するよ！」

「!? はや……！」

突然若葉は、強い光に包まれた。悠城が放つた光ではなく、まばゆい、地の神の力だ。

悠城のエネルギー弾が床を削り取つたときには、若葉はもうそこにはいなかった。

「よく避けたねえ。てつきり義経の力でも避けられないと思つてたよ。」

目に見えないスピードで移動したはずの若葉を的確に見抜き、少しも戸惑うことなく

その方向に向かって話しかける。

危なかった……。

若葉は悠城の動きを落ち着いて観察しながらも、冷や汗をかく。

相手がどんな行動をしても牽制できるよう義経の力を宿しておいたのに、実力を読み違えた。

それに……。

若葉は悠城の投げた光球が当たった位置を見る。

さつきまで磨き抜かれ艶を出していた石の床が、茶碗のようにボールのした半分のにきれいに抜き取られている。

あんなものに巻き込まれることなど想像したくない。

「さあ、ブーツとしてないで次行くぞ！お前もできることなら仕掛けてこいよ！」

悠城はさつきと同じ球を空中に10個程度生み出し、若葉に向かって飛ばしてきた。

「……！ やばい！」

若葉は義経の力を最大限に利用し、球を避けていく。

そして最後の1つが見当違いな方向に向かったところで、出せる限りの全速力で悠城の心臓に刀を突き刺した。

突き刺した地点から、刀を引き抜くと、噴水のように血が上がった。

やっぱり人間と同じ形をしているから、弱点も同じではないかと思っただのだ。

「私の仲間を愚弄した罪だ。心は痛むが……あの世でしっかり悔い改め……」

「じゃあこれで罪は償ったから、もう俺は無罪だね。」

悠城がさつきまでと全く同じ声色で喋り、若葉は悠城にもう一度向き直った。

心臓を貫かれ、口からも血が流れ出ているのにまともに話せるはずがない。何なら、もう死んでいるとさえ思っていた。

「若葉ちゃん……血が……。」

ひなたに言われて若葉を見ると、胸の穴から流れ出たおびただしい量の血が、ブクブク泡を出している。

そして、沸騰したように消えてなくなった。

「どういふことだ……。天使の血とは……。こんな……。い！」

若葉が驚きの声を上げると、悠城は傷口から煙を上げていた。

服についた血が蒸発し、傷口が露わになると、その傷口も消えてなくなっていた。

「これが天の神に選ばれた天使の能力……不死身、だよ。僕につけた傷は、そこから溢れた血ごと無くなるんだ。」

悠城はゆったりとした速度で、若葉に歩み寄った。

「く……。そんなことが……。」

今までのバーテックスは、たとえ完成体であっても受けた傷が完全に癒えることはなかった。

さっきの床を消滅させる攻撃と合わせても、悠城の能力は勇者のそれを遥かに上回る。この力の源は、どこから来ているのか。

こんな馬鹿げた存在に、勝てるわけがない。

「だが、なにか弱点はあるはずだ！たとえ相手が不死身でも、勇者とは絶対諦めないものだ！」

それを聞くと、悠城が馬鹿にしたような顔をした。

「勇者ねえ……。勇者って言っても、目の前で見てる人がいるじゃないか。」

悠城が首を横に向ける。若葉もそれに合わせて振り向くと、その先に千景がいた。

「ひっ……………い、いや……………」

千景は2人から見られた途端に顔を背け、固く目を閉じてしまった。

よく見ると身体を小さく震わせ、怯えに耐えることで精一杯なようだ。

「千景！ 私と一緒に戦ってくれ！2人で一緒にこいつを倒すんだ！」

「い……………嫌よ！…こんなの勝てるわけ無い！私は生きたいの！伊予島さんたちみたいなの、あんな惨めな死に方なんて……………」

千景は喚くように答えた。しかし若葉も、先程悠城にさんざん仲間をバカにされ、言

葉には過敏になっている。

「何を行っている！千景!!お前は勇者だろう!お前にしかできない、お前だからやるんだ!」

「嫌だつて言ってるでしょう!誰も勇者にしてくれだなんて頼んでないのに!好き勝手任命した連中こそ、安全なところで見てるだけじゃない!そいつらがやればいいのよ!」

千景は怒鳴り散らした。長い髪を振り乱して怒る彼女の目元には、うつすらと涙が伝っている。

「千景……。」

「……。」

そんな千景を見ていた悠城は、彼女の方に向かって手を伸ばした。

その手の中には、さつき若葉に向かって打ち出したエネルギー弾が浮かんでいる。

「いっ……いや……!」

千景は後退るが、腰を抜かしたのか尻もちを付き、自分の思うように逃げられなかった。

「千景——」

「なーんてな！標的はお前だよ！」

撃つと思われた瞬間、悠城はくるりと若葉の方へ向いた。

「ぐっ……うああアああああー……！」

直撃した若葉の方から血が飛び散り、削り取られた肩から彼女の左腕が落ちた。

「乃木さん！」

「若葉ちゃん！」

残された友達を守るため、この日、乃木若葉は片腕を失った。

そしてその事實は、今後の戦いに大きく響いてくるだろうー。

## 友情の境界線

「何だと……。う、嘘だ。こんな、こんなことが……」

若葉は肩口を削り取られ、そこから吹き出る血と床に落ちた自分の左腕を呆然と見つめた。

ひなたの悲鳴、悠城の笑い声が遠くに聞こえ、シヨックで視界がぐにやりと歪む。

唯一事態が良くなったことといえ、さつきまでとは左肩が比べ物にならないほど軽くなったことくらいだ。

「あつはは！ お似合いだねえ、勇者様！ その信じたく無さそうな表情、とても良く似合ってるよ！」

「う……嘘だ嘘だ嘘だ!! こんなことあるはずない!」

若葉は耐え難い現実を振り切るように、悠城に斬りかかった。

これで確信した。

このクズをここで排斥しなければ、仲間たちも同じ目に遭う。勇者以外の人間が力を持つなどあつてはならない。

「お前って単純過ぎるんだよな。」

悠城は自分の姉の馬鹿すぎる行動にため息をついた。

そして左腕を失ったことでバランスを崩し、悠城にとつて蹴りやすいところに来た若葉の顔を下から蹴り上げた。

若葉はまた吹っ飛ばされ、床に叩きつけられた。

「悲しいなあ。3年間修行してる暇があつたのに、この力の差。力を与える神の違いつて言うのは大きなもんだねえ。」

若葉は応えない。ただ床に丸まって、半開きの口で呼吸をしているだけだ。目元は髪で隠れて見えなくなっている。

「さてと……。」

悠城はがっかりした。記憶の中の自分の姉なら、もう少し抵抗してくれそうなものだが。

悠城はもう若葉に抵抗する力はないと判断し、残った千景とひなたに目を向けた。

千景は怯えた表情を浮かべ、ひなたはその場に座り込んだ。

「1番の脅威も狩り終わつたし、後は残つた獲物を潰していこうかな。」

「わ、私は……まだ死ぬわけにはいかないわ……！」

千景は上ずつた声を上げて後退つた。

「私は選ばれたの！生き残るための力を……皆に讃えられる力をもらった！ここで死

ぬわけには行かないわ！」

千景は、歪んだ笑顔を浮かべて葬儀場から逃げていった。

悠城は多分、恐怖が歪んだ結果なんだろうなと思っただけで追いかけていなかった。

この場には結局、床にぺたんと座り込んだひなたが残った。

「意外だね。君は命乞いしないなんて……。」

悠城がひなたに話しかけた。

ひなたは別の方向を向いたまま、悠城の言葉に答えた。

「若葉ちゃんを一人で死なせるわけにはいかないんです。そうしたら、絶対にあの世で無茶するでしょうから……。」

消え入りそうな言葉だったが、芯には意志と熱があり、悠城はまだこの人が諦めていないことを確信する。

「……。」

若葉は分からなかった。

バーテックス、それよりも上位の存在を名乗り、その力を見せた悠城、それらを生み出した天の神。

なぜ彼らが人類を淘汰するのか。なぜ球子や杏、多くの人たちが殺されたのか。

なぜ千景が逃げ出したのか。ひなたが諦めないのか。

どうして自分が立ち上がって、彼女らを助けようとしなのかな、彼女には全くわからない。

「けど残念だよ。命乞いする人を殺すのは楽しいって殺人鬼の良いそうなセリフがホントなのか、確かめたかったんだけど。」

悠城は呑気に言い放ち、自分の手にさつき若葉の腕を切断したのと同じ光球を作り出す。

「……それは残念でしたね。私は神樹に仕える巫女として、あなたの思い通りにならないことを願うばかりです。」

ひなたは縋るように祈る。

ひなたは相変わらず別の方向を見ている。

幼い頃からそばにいて、役割は違えど共に神に選ばれ、今日まで苦楽を共にしてきた親友を見ている。

悠城と、それが生み出した自分の身を滅ぼす光など、興味も沸かない。

なぜならー

悠城の放とうとした球が、その直前で真っ二つに切り裂かれ、消滅した。

それと同時に悠城の右腕が切り落とされ、後方に飛ぶ。

「……若葉……！」

常に余裕を持って戦っていた悠城の表情は、ついに崩れた。

悠城は床を蹴って距離を取り、それと同時に空中に作った光球を複数個、若葉に投げる。

刹那、若葉の目の前まで飛んだ光球が消えた。

悠城の目には、神樹の霊力で作られた見えない腕が複数本肩から伸び、握った見えな  
い刀で切り裂くのが見えた。

反対に若葉の目は、黒かった瞳は青く燃え、悠城の攻撃をハッキリと見切ったようだ。

「……精霊の暴走、って言うのかな。でも、大切な人を守るヒーローとは言えない、醜  
い姿だね。」

悠城は胸を抑え、楽しみと恐怖で戦慄する気持ちを閉じ込める。

「……殺してやる……。」

若葉は無感情に喋り、無感情に構えた。

## 精霊の底力

「若葉……ちゃん……？」

ひなたは、自分を助けるための飛び出してきてくれたはずの背中を見て、違和感を感じた。

今、ひなたの身体は震えている。天使という脅威にすら怯えなかった彼女が、親友の容態が異常なものである事で、初めて震えた。

私が……私が若葉ちゃんを支えないと……！

そう思つてひなたは若葉に手を伸ばしたが、そうするには一瞬遅かった。

「……クロス。」

その一言が勝負の開始の合図だった。

「来るー！」

悠城は攻撃を交わすように横に飛んだ。若葉の肩からは霊力のみの実体のない見えない腕があるので、それを加味して飛んだ。

けれど若葉の剣は、そんな悠城の腹を切り裂いた。

悠城の身体が衝撃で吹っ飛ぶ。壁にぶつかり、大きなクレーターを作った。

「……完全に予想外だよ。ここまで俺の動きを、完璧に見切れてるなんて……。」

クレーターの中で悠城はほくそ笑むが、これは本気でマズイ。

何がマズイのか。それは――

それよりも早く、若葉の腕が伸びてきた。本当は悠城のいるクレーターの中だけを切れば良かったのだろうが、過剰な力で周囲にも亀裂が走る。

10本以上も腕のある彼女の腕は、おそらく一本だけでも脅威になるだろう。

悠城も跳躍して避けるが、うまく身体をコントロールできず、空中でバランスを崩して床に落ちた。

何がマズイか。それは、先程切られた悠城の腕がまだ再生していないのだ。

天使の力があれば、失った身体くらい、数瞬で元通りのハズだ。

「ドオなってるんだよ……。体痛いし動きにくいし、相手は強いし……。」

悠城は脳裏に浮かびはじめた焦りを振り切って、若葉を見た。

若葉はあれだけの全力の攻撃をした後でも、こちらを見失ってはいなかった。

まるで彼が避けることも、その方向も分かっていたかのようなのだ。

「……キレタ。クルシンデル。……コロセル。」

若葉は見えない腕を高らかに掲げ、目から溢れる霊力の炎を煌々と燃やした。

そして今度は、ひなたにだって見えている本当の刀の握った右腕を構え、足を大きく

開いた。

なんの事はない。若葉が戦いでいつもするような構えだ。理性は無いとしても、体に染み付いているといえれば納得する。

でも、そうじゃなかった。

本当は、そこから悠城の元まで走り出してからが問題だった。

若葉が足を動かした瞬間、衝撃波とも言える突風が吹き荒れ、悠城を、ひなたや杏たちまで巻き込んでしまった。

「ウゴアアアアアアアア！」

若葉が咆哮を轟かせて悠城に切りかかり、悠城は思わず黒いバリアを張って対抗した。

以前に悠城が若葉に向けて飛ばした光球の応用。

しかしその光球も切ってしまった若葉は、このバリアでさえ簡単に破ってしまうだろう。

「……まさか地の神の勇者なんか、ここまで追い詰められるなんて……うん？」

悠城はバリアの中で若葉を待ち構える間に、床にあったあるものに違和感を覚えた。

そして、バリアは数秒と持たず、風穴が開けられた。

理性を保っているかも分からない若葉が、その歪に伸びた口元を笑みでさらに歪ませる。

「やっぱいな……。お前はすげえよ。……完全に俺を上回ってる。俺の……。負けだ……。」

悠城はそんな若葉を見て俯き、右腕をだらりと下げた。これが彼なりの、戦意が失われたことを示す合図だ。

「トツタ。……。シネ。」

若葉は持つている刀を悠城の胸に突き立て、悠城の命を奪おうとした。

若葉は、再生しない攻撃を繰り返す。今の攻撃が本当に悠城の心臓を穿けば、彼は再生することなく絶滅する。

「……。油断したな！ 獲られるのはお前の方だよ、目にももの見せてやる！」

悠城は予め空中に準備しておいた光球を鋭く尖った円錐に変形させ、若葉の身体に突き刺した。

霊力の棘は若葉の身体を貫き、そのまま伸びて壁に衝突した。

棘に穿たれた若葉は、おびただしい血を流しながら空中に吊るされる。

その後も、数秒の間は手足で藻掻くように動いていたがその後ようやく停止した。

「手こずらせやがって……。でもこの死にざまは、そこらに転がってる仲間とおそろいだな……。」

悠城が杏と球子を探そうと周囲を見渡すと、ひどい有様だった。

悠城が事前に暴れたのもあるが、何より若葉の爪痕がすごすぎる。

若葉の元いた地点から悠城までたどり着くのには数メートル。その間だけの猛ダッシュで葬儀場全体をポロポロにしてしまった。

もう葬儀場だった頃の部屋の面影は見る事ができない。

同時に杏や球子、ひなたの影も見ることができない。

「お前、もしかしてー」

悠城は宙ぶらりんになった若葉に話しかけようとしたが、できなかった。

別に若葉が死んでいるからとか、そういう事ではない。

胸のうちからこみ上げてくるものが邪魔をして、言葉を紡ぐことができなかったのだ。

その感情とはー嘲笑だ。

「ぶふっ、お前自分の仲間を吹き飛ばしちゃったの？アッはは、じゃあお前さんの為に戦ってたんだよ。仲間仲間って言って結局自分のためー」

「だ……あ……れ。」

悠城は大きく目を見開いた。

「私……仲マ、見捨てナイ……。ゼンプ、助けル……！」

若葉が動いた。

右手に加えて見えない手も果敢に動かし、剣を突き刺してついに棘を叩き折った。

「お前……マジかよ……。」

悠城は彼女の圧倒的な生命力に絶句する。

見ると、棘に貫かれて体の各所に空いていた穴も塞がり、さつきと全く同じ状態に元通りだ。

……いや。さつきまでの戦いとは違う。

悠城の肩から腕が生えてきた。若葉にさつき切られた腕がようやく再生したのだ。

それだけじゃない。まだ変わっていることもある。

「終わらせてやるよ、乃木若葉。お前を殺して、俺は俺の守りたいものを守る。壊したものは全部壊す。」

こちらを睨む姉を見据えて、悠城は呟いた。

## 最後の一本

正直言うと、若葉は強い。

再生の力を無効にされて、バリアも破られて、しかも致命傷の傷までもしないとは思ってもみなかった。

若葉が動く。

見えない腕を巧みに使って、様々な方向から悠城を切ろうとする。

悠城は動かさずその腕を見て、自分の腕を高く掲げた。

瞬間、若葉の見えない腕はズタズタに切り刻まれ、細切れ上になって床に落ちた。

悠城はここまで来てようやく目にも止まらぬ速さで動き若葉の懐に入り、若葉の脇腹に手のひらを押し付けて霊力を放った。

「コ……シャ……ク……ク……」

若葉が右腕に握った刀で悠城を切りつけようとする。悠城は後ろに飛んで避けるが、彼の肩に彼女の刀が食い込んだ。

「悲しいなあ。ちよつと霊力の流れを邪魔されただけで、ここまで力が弱まっちゃうモンなんだね。」

悠城は肩を切られたが、さっきまでのように腕を切り落とされたりはしていない。そこにあるのはまっすぐに切られたはずなのに、まるで心電図のようにギザギザした傷だけだ。

「くそ……。ふ、ぎげ……」

ここへ来て、理性を保っているかも定かではない若葉の顔に焦りが見え始める。

しかし若葉は逃げた悠城に対し、間髪入れずに次の一撃を繰り出す。

悠城は靈力の光球を放ち、見えない腕を消滅させた。

消された腕の代わりはもう若葉の肩からは生えず、残りはいつの間にか一本だけだ。

「私は……お前を……殺して……」

「やつと言葉が人間に戻ってきたな。ここまで戻るのに思ったより苦労したよ。」

悠城は気楽に、大きく伸びをしなから若葉を見て言う。

元々悠城と若葉の力の差は歴然。ならば暴走さえ抑えられれば、この勝負は悠城が勝つたも同然だ。

「ごめんね。もう身内の好よしみとか無いから。止めはじつくりやるよ。人の名誉を踏み

じつた人間が、そう簡単に逝けるとー」

「ーひなた。」

若葉が呟いた。言わずもがな、自分を今日まで支えてくれた親友の名である。

ここで初めて、若葉は自分の意思を持って周囲を見渡した。

「やつと気づいたのか。ここでどんな反応するか見物だけど……あ、いいこと思いついた。」

悠城は残酷な笑みを浮かべて若葉に近づいた。若葉は暴走の直後で上の空になっており、悠城に警戒する事が出来ない。

悠城は若葉の右肩に手を乗せ、できるだけ身体を若葉の右腕に密着させる。

そして悠城は若葉の耳にこう囁いた。

「凄かったね……。さっきの力。さっすが僕のお姉ちゃん。だってちよつと走っただけでこの部屋の物、全部吹き飛ばしちゃうんだから。」

「な、何を……」

「本当にすごいよ。だって、親友を殺してまで僕を倒そうとしたんだよ？そんなこと、普通はできないよ。普通だったら……。」

若葉を刺激するような口調で囁く。

本来、このようなやり取りがあるとひなたが若葉の前に出ていくと、悠城は知っている。

ここではつきり言おう。悠城は若葉の弟だ。

だからこそ、悠城は若葉が怒りの感情に弱いことは知っているし、ひなたの重要さも

理解している。

そんな人間が若葉の怒りの逆鱗を、ひなたのいない所で刺激するとどうなるか……。

「親友……ひなたを……殺した？私か？……嘘だ……。」

「嘘じゃないよ。僕がお姉ちゃんに嘘を、言うわけじゃないじゃないか。」

若葉の頬に、ツウツと涙が流れた。

悠城はてつきり発狂すると思つたが、もうそんな体力も残っていないらしい。

「うーん。面白くならないなあ……。こいつの性格なら絶対怒ると思つたのに……。」

悠城は若葉の耳から口を離し、考え込んだ。

どうも自分の考えどおりに行かない事で、業が煮えつつあつたのだ。

「もうこのままテキトーに痛めつけて殺すっていうのも1つの手……あれ？」

悠城は若葉の背中に垂れている、見えない腕を見つけた。

さつきまで若葉が暴走していた名残。

この腕をさつきと消滅させてしまえば、若葉は完全に意識を復活させて、悠城と再び

戦い始めるだろう。

それも、悠城にとつては若葉とは片手でも勝てる分全然良いのだがー。

悠城の口が、また残虐に歪んだ。

「……………ん。んんは……………」

ひなたは失っていた意識を回復させ、周囲の状況を確認しようとする。

まず、仰向けになった身体。これはさつきまで気を失っていたのだから、仕方ない。

しかし気になる点が、2点ある。

まず自分の身体を支えているもの。妙に体にフィットする割には骨組みらしい細い棒2本に支えられており、妙に不安定だ。

脚も投げ出されているが、首元はしっかりと固定されている。

もう1つは、激しい振動。

規則的ではあるが上下に激しく揺れ、今までよく眠っていられたものだと感心するほどだ。

そしてようやく視力が戻ってきたところで、辺りの様子を確認する。

ここは、建物の中。しかし、ひなたがさつきまでいた葬儀場のあった建物とは違う。

……いや、ここは来たことがある。病院だ。今、自分は病院の廊下にいるのだ。

だとすれば、どうして病院の廊下で上下の振動を感じているのか。

地震か。いや、地震ならもつと悲鳴や警報機が鳴るはずだし、普通地震は横揺れだろう。

「あ、ひなたさん！良かった、目が覚めた！もうすぐ高嶋さんの病室に付きますから、もう少し辛抱をー」

「キヤアアアあああ！」

ひなたはこの現実を認められず、手のひらで相手の頬をひっぱたく。

自分が愛してもいない、見ず知らずの人間にお姫様抱っこされている現実を認めたくなかった。

ひなたを抱えていた人は、彼女のピンタの想像以上の威力に倒れ、ひなたを床に投げ出した。

「あ、ご、ごめんなさい！突然でびっくりしたものでー。お怪我はありませんか？」  
本当に突然で相手の顔を見ていなかったのだ、偉い人だったときのために一応謝るフリだけしてやろうとおもったのだが。

「ーあ、はい。大丈夫ですよ、ひなたさん。ぼく、乃木悠城は元気です。」

途切れた記憶の最後、親友と戦っていた男と同じ顔と名前をした男が、そこに倒れていた。

## ヒーロー、現る。

「乃木……悠城……。」

ひなたは病院の廊下の真ん中で、敵だったはずの男の顔を凝視した。

ひなたの中に、彼についての様々な情報が渦巻く。

まず彼は、若葉の妹で、香川県にいた。

しかし乃木家のような剣の家元に生まれながらその才能が全くなかった彼は、日頃から家族やクラスメイトから冷たくされていた。

耐えかねた悠城は、ついに博多の祖父母の家に預けられ、ひなたもそれ以来会っていないかった。

「あなたは長崎に引越したあと、現れたパーテックスに襲われたはずですよ。なのになぜ……ここにいますか？」

ひなたは目の前の相手が考え込んでしまい、キョトンとする悠城に質問した。

葬儀場の方にいた悠城は、天の神に力をもらったと言っていた。

パーテックスの側につくことで、生き残ることができたと。おそらくそういうことだろう。

しかし、今そっちの悠城はまだ戦闘中のはずだ。ならばこっちの悠城からは、なにか違う答えが返ってくるはずだ。

「僕、長崎で怪物が現れたとき、力をもらったんですよ。天の神って人から。なので死なずにここまで来れてー」

ひなたは悠城をまたひっぱりたい。

「痛あいー！」

「あなたが若葉ちゃんを……もう戦いは終わったのですか！若葉ちゃんをどうしたの！私が眠ってから、どれだけ時間が経っている！」

力で勝てるとは思わない。でも、あそこになっていた悠城とここにいる悠城が同一人物なら、若葉はもう戦いに敗れて死んだことになる。

「お、落ち着いてくださいひなたさん。僕もお姉ちゃんは守りたい側ですから！ていうか、僕とアイツは複雑な関係でー」

「うるさいー！」

ひなたは口答える悠城にもう一度、ビンタを食らわせてやろうとした。

しかしー

悠城がひなたの前に手をかざした。

霊力を流し込まれているのはひなたにでも分かるが、意外と痛みはない。

むしろ何かを頭から抜き取られていくようで、怖くもあった。

「あの……何を……。」

ひなたは悠城に向かって話しかけるが、言葉の棘がなくなっていることに自分でも驚いた。

怒りで手が動いたり、体が震えたりすることもなく、そのままその場にお尻をつけて座り込んでしまった。

「あいつにこんなことは、できないと思います……ごめんなさい。」

悠城は静かにつぶやいたあと、ひなたにペコリと謝った。

「どうして謝る必要があるんですか？ 私はもう、怒っていませんよ。」

ひなたはむしろ、早とちりで怒り、人に手を出してしまった自分の短絡さを恥じた。

大社の巫女として、これからはその身分に恥じない行いをしていこうと思った。

そんなの事思っていると、悠城が齒がゆそうにこつちをじつと見ていた。

「わ、私の顔に何かついてますか？」

「あ、はい……し、強いて言うなら、に、ニヤニヤ顔が……。」

申し訳なさそうに言う悠城に、ひなたは赤面した。

—————

「ひなちゃん！ 良かった！ 戻ってきてくれた！ ひなちゃんまでいなくなった私……」

わたし……………」

「ゆ、友奈さん。泣かないでください！私はちゃんここにいますから！」

友奈の病室にたどり着くと、友奈は入ってきたひなたに抱きついた。

脇のベッドには既に、杏と球子の遺体が寝かされていた。友奈はユウキが2人を連れてきてからここに戻るまで、ずっとひなたの身を案じていたのだから、嬉しくなるのも無理はない。

「ユウキ君もありがとうね。2人の身体だけじゃなく、ひなちゃんまで……………」

「…………別に感謝されることはしてないです。それより、僕はもう1往復して、お姉ちゃんを……………」

友奈の言葉に答え終わる前に、ユウキはガクツと膝をついた。額には汗がにじみ、息が切れる。

「ユウキさん！」 「ユウキ君！」

ひなたと友奈が叫び、ひなたが駆け寄る。友奈はベッドの上から降りられないが、辛そうにユウキを見る。

「…………結構便利なんですけどね。感情を動かす力は。ただ結構神経使うんで、疲れちゃうみたいです……………」

ユウキはできるだけ平気そうに答えたかったが、息絶え絶えになり、ひなたたちにそ

の意図は全く伝わらなかった。

「ユウキさん……。」

ひなたは考える。あの葬儀場で若葉と悠城がまだ戦っているとすると、体調不良のユウキ一人で助け出すのは難しい。

「私が行くよ！もう怪我也治つたし、相手がどんなに強くても私は諦めー」  
友奈は張り切り、拳をシュツと突き出すと友奈の口から血が漏れ出た。

「こ、こんなのなんともないよ！一目連の力だけでも、どうにかなるって！」  
療養中の友奈を行かせる訳にはいかない。そうすれば絶対に怪我が悪化するし、まともにも活躍できるかわからない。

こうなったら、自分が行くかー

ー論外だ。戦えないひなたが行けば役立たずな上、若葉にだってひなたを守る為に動かなければならない。

「一体どうすれば……!?!」

ひなたが頭を抱える。このまま悩んでいる間にも、若葉が悠城に殺されてしまうかもしれない。

残念だがここは、友奈に命を削ってもらおうしかー

ひなたが最悪の手段を考え始めたその時、

「何か、今にも泣き出しそうな顔してますよ、ひなたさん。」

「……ユウキさん。」

ユウキがひなたを励ます様に声をかける。もう顔色もマシになり、少し微笑んで見せていた。

「さつきひなたさんたちを助け出したように、もう一度やってみます。ワンチャン、隠れてコソコソやれば行ける気がしますし。」

「……でも！それがもし失敗したら、あなただって戦うことになりますよ!?!そんな体調で勝てるわけ——」

「最初から僕に戦う力はありません。」

予想外だった。

ユウキは、自分の高ぶった感情を操ってみせた。

そんな神のようなことができるのなら、全開の体調ならば悠城にも勝てるのではないかと思っていた。

「もともと僕にあるのは、感情を操る力。それとほんの一瞬だけですっごいスピードで走れる力だけなので。それでなんとかやってみます。」

「……それで私達を、あの葬儀場から助け出したんですね……。」  
これで大体の辻褄があつた。

ユウキは一瞬だけしか早く動けないから、その場から微動だにしないひなた、杏、球子を手助けした。

戦う力がなかつたから、若葉は後回しにし、友奈のいる病室に三人を運んだ。

最後に分からないことがある。

「あなたは何でもう一度、あの葬儀場に行くんです？ 戦えないあなたが行っても、何もできません。ここはその……友奈さんに任せて……。」

「えっと、それはー」

ユウキが答えようとしたとき、病院をも動かす爆発音が轟いた。

三人が外を見る。

ユウキたちがさつき出てきた、葬儀場がある建物。

その屋根を突き破り、高層ビルほどもあろうかという高さに至る、ある怪物が佇んでいた。

## 守るための身体

ユウキ、友奈、ひなたの三人は、突然の轟音に驚いて病室の外から窓を見た。さっきの葬儀場。その屋根を突き破り、地上に立っている巨大な生物。

いや、生物と表現して良いのかも、三人はわからなかった。

まず、それには巨大な黒い翼があるのだが、もう大きいとかいうレベルじゃない。地上からビルの高さまで、その大きすぎる翼で立っている。もうあのサイズでは、重すぎて飛ばたけないのではないだろうか。

「な、なんだろう、どうしよう!? あれ何? バータックス!」

「つ、翼ですか? 大きい……! あんなのに暴れられたら、四国が壊滅してしまいますよ!」

友奈とひなたは、普通の人間なので分からないだろうが、ユウキは感じた。

彼の鼻をつくような、流れの激しい地の靈力。

そして2本のアーチ上に伸びた先、上空数十メートルにぶら下がった、意思なき本体。

「お姉ちゃん……! ひなたさん、友奈さん、僕行つてきます!」

あつけにとられる二人を無視して、ユウキは病室から飛び出した。

ユウキが向かっている翼の根本では、悠城が降ってくる羽を避けながら、その翼の頂点にいる若葉を見上げた。

彼の足元には、若葉の右腕と彼女の刀が落ちている。

「いい格好だねえ……。見えない腕が残ってたから、霊力流し込んで動かして、腕切り落とされて逆上でまた暴走して。ホントに救いようが無いよね……。」

悠城はそう言いつつも、若葉の翼から降ってくる羽の位置を見逃さない。

フワフワと幻想的に舞っている羽も、霊力の塊だ。触れれば傷を負うし、暴走状態の相手に受けた傷はなかなか癒えない。

「でもまあこれでお前は、僕の想像どおりに動いてくれたんだよ。ここからはどう動いたって、僕の予想通りになるからね……。」

「それ僕に言ってるの？」

悠城が後ろを振り向くと、そこにはユウキがいた。彼の手には姉の使っていた刀いくたち生太刀が握られている。

悠城は身構えたまま、目だけ動かして足元を見る。生太刀はない。

「こいつ、どうやってこの刀をー？」

「すごいね、お前。どうやってここまで来たの？全然気づかなかった。それにその刀

もどうやって？俺も目は良いから、大抵のもんは見えるつもりだったんだけど。」

「返ってこないと分かっている質問するのやめろよ。僕はお前の間に答えるほど、仲良くない。」

悠城はそりやそうだと呟いて、ユウキをもう一度見直した。今度は鋭い、戦闘中の目だ。

ユウキは刀を構える。先刻ひなたに言ったように、ユウキに戦う力はない。

でも彼の力を応用して、刀を通して神樹の中の精霊のデータにアクセスできれば――ユウキの目が青く燃える。そして彼の肩や背中から、靈力でできた見えない腕が無数に生える。

「――お前の力をもらおうよ。」

「――お前の身体、乗っ取ってやる。」

悠城とユウキはその瞬間、消えた。直後にあらゆる所で壁や床の崩壊が起こり、二人がもう一度現れたときにはもう、葬儀場は原型を留めていなかった。

悠城は部屋の隅に着地し、ため息を一つ吐いただけだった。しかし、ユウキは――「フー、フー、うぐ……っ。」

ユウキは膝をつき、生太刀を床に突き立てた。身体にかかる想像以上の負担に、我が身ながら愕然とする。

「……想像以上の強さだね。でも身体にキツそう。たつたこれだけの事で息も荒れてるし、顔色も悪そうだしさ。まあ、『暴走を制御する』なんて矛盾してることをやってるんだから当然か。」

悠城は彼のことを見て笑う。しかし、目だけは笑わずに、ユウキに自分の手を伸ばす。その瞬間、ユウキの皮膚が裂けた。

しかし、そこから血は出ない。代わりに煙が出て、即座にユウキの傷を修復していく。「さつすが霊力の塊。人間と違って、ちゃんと自己修復出来るんだねえ。」

「修復じゃないって、分かかってて言ってるだろ。お前……。」  
ユウキが自分の顔に手を触れた。

さつき傷があつた場所が、少し凹んでいるのを、ユウキは感じた。

「まあそれもしようがないかあ。君は僕と違って、生身の肉体を持ってないんだもんね。」

悠城は今度は黒い光球を作り出し、ユウキに投げつける。

ユウキは幾本もの見えない腕で防御し、悠城に再撃の隙きを与えない内に悠城に肉薄した。

「アレえ？ちよつとちつちやくなちやつた？俺とお前つて身長おんなじじゃ無いのかなあ。」

「お前ってほんとにムカつくよな……。」

悠城は腕を容赦なく奮って悠城をふつとばす。

腕の一本くらい取れればよかったが、それは、ユウキ自身の性質が許さない。

「その靈力の腕を全部もげば、君の身長はもつとちっちゃくなるの?」

悠城は床にめり込んだクレーターの中から聞いてくる。勇者たちからしてみれば奇

妙な光景だが、不死身の悠城にとっては普通のことだ。

でも、ユウキは違う。

悠城が彼をからかっている通り、ユウキは生身の肉体を持たず、だんだん身長を縮めている。

彼の靈力は天使である悠城や勇者と違い、神からの供給はない。

だから彼は、体を構成する靈力を削って力を振るうしかない。

一応、ユウキは見かけ上は悠城と同じ不死身だ。

しかし一方で、手持ちの靈力をすべて使い果たしたとき、彼は――。